

その時正成、はだの守をとり出だし、これは一とせ、都に戦いありし時、
くだし給ひし綸旨なり、これを汝にゆづるなり、我ともかくとなるならば、
世は尊氏の世となりて、吉野の山の奥深く、叡慮をなやましたまはむは、

鏡にかけて見る如し、さはさりながら正行よ、しばしの難をのがれむと

*息子の側ににがり寄る「シユツシユツ」という衣擦れの音

*弓に弦を張ったような形の月。半月のこと。

弓張り月の影くらく、家名を汚すことなかれ。(テン、テン、テテテ：)

*オトシ||名場面の時の効果音

《合の手》

*器楽部分。ここから正行の功績

父が子なればさすがにも、忠義の道はかねて知る、うちもらされし者共を、

はぐくみ扶助しかくれがの、吉野の川の水清く、流れたえせぬ菊水の、

*「シユツシユツ！」

旗をふたゝびなびかして。

《合の手》

*敵陣を前に、勇壮とたなびく菊水紋。両陣營の緊迫した様子。やがて激しい合戦が始まります。

敵を千里にしりぞけて、叡慮をやすめたてまつれ、あゝ叡慮をやすめたてまつれ。

*「シユツシユツ！」

【鑑賞のポイント】

- ① 「自分が亡くなった後は、足利の世となるだろう」と世の行く末をなげき、息子に未来を託す正成ですが「さはさりながら正行よ」と息子の側に寄って行き、「しばしの難をのがれん」と河内の国へ帰るよう告げます。若干十一歳の正行は、それでも父と同行することを願いますが、息子の側にそっと寄って諭す姿には、やはりどこか父親の情が感じられます。



② この曲には「シュツシュツ」という「すり爪」の音が三回入っています。一度目は、息子の側に寄って行く絹擦れの音。二回目と三回目は、兄弟で刺し違えて自決した楠木親子の壮絶な最期を見事に描いています。

③ 「合の手」とは、唄と唄の間の器楽の部分です。この曲では、「人馬一体」となった合戦の様子がリアルな技法で描かれています。駆け抜ける馬の前脚、キラツと光る刃の様子を箏が、刀を振り上げるかのような動作を三絃の撥が見事に表現しています。

④ 正行は、父親に劣らぬ名将でした。川に落ちた敵方の兵五百数十人を救出、寒さで凍りつく体を温め、衣食と薬を与えて介抱し、故郷に帰しています。「うちもられされし者共を、はぐくみ扶助し」がその場面です。川に流される敵兵をすくい上げ、傷ついた者に肩を貸し、トボトボと歩いているかのような手法がよく聴くと入っています。正行のこの慈悲に感謝して帰順、四条畷で討ち死するまで従った者もいたそうです。明治の始め、日本が赤十字に加盟する折に、この話が欧米人の心を動かし、日本の加盟が認められました。